文京区アカデミー推進計画策定協議会
第２回観光分科会

日時：平成２２年７月５日

午後１８：３０～２０：３０

場所：文京シビックセンター１０階　１００１会議室

文京区アカデミー推進部アカデミー推進課

文京区アカデミー推進計画策定協議会 第２回観光分科会議録

（敬称略）

「出席委員」

座　長	野口 洋平
委　員	上田 武司
委　員	白井 圭子
委　員	市川 正明
委　員	山本 重子
委　員	小野 光幸

「事務局」

アカデミー推進部観光・国際担当課長	小野 光幸
アカデミー推進部アカデミー推進課	萩原 靖恵
アカデミー推進部アカデミー推進課	佐藤 祐司
株式会社富士通総研	高橋 誠司
株式会社富士通総研	近藤 田津

○事務局：それでは時間になりましたので、先生、開会をお願いします。

○野口座長：では開催したいと思います。お忙しい中、またお疲れのところ、よろしくお願いいたします。ありがとうございます。では出欠の確認ということでお願いしたいと思います。

○事務局：それでは本日の出欠についてご説明いたします。中井委員と奥田委員、２名から欠席の連絡が入っております。それから団体の役員の異動等がございまして、そちらの説明を先にさせていただきたいと思います。分科会員名簿をお配りしてお手元にありますけれども、新たな委員といたしまして生涯学習分科会－２、町会団体の文京区町会連合会からの団体推薦で異動により村松様から渡辺泰男様に。国際分科会－３、ＰＴＡの中学校ＰＴＡ連合会からの団体推薦で本松様から清水文雄様に変更がございました。出席状況等は以上でございます。

○野口座長：ありがとうございます。配付資料の確認と、その説明をお願いできるでしょうか。

○事務局：それでは配付資料です。まず、事前に郵送でお送りさせていただきました第２回観光分科会の次第等の資料はお手元にございますでしょうか。もしない場合は挙手をしていただければ、今お渡ししますので、ではお願いいたします。続きまして本日席上配付の資料でございます。皆様のお手元にお配りしている資料で５点ほどございます。まず第１点目がこの座席表、２点目が今説明させていただきましたアカデミー推進計画策定協議会 分科会委員名簿、６月１日現在のものでございます。３点目が文京区アカデミー推進計画調査報告書 追加集計資料でございます。４点目と５点目がいつもお配りしているご意見シートと。もう１つ事業の提案等をしていただきたいと思っておりますので、そちらのご意見シートの２種類なっております。それでは先にお送りさせていただきました次第と書いてあります今日の資料の説明を簡単にさせていただきます。

まず１点目の資料観光第１号、アカデミー推進計画観光分野の体系（案）と書かれたものでございますが、既に作成されております観光ビジョン体系に、第１回で委員の皆様からいただきましたご意見を整理してまとめたものでございます。２点目の資料観光第７号の分野別計画骨子（案）でございますが、体系（案）で示しましたアカデミー推進計画分野別の目標、観光ビジョンでいう柱ですけれども、その目標ごとに、現況整理や調査結果や、委員の皆様のご意見を現在把握できる範囲で成文化したものでございます。

○市川委員：資料７ですか。分野別計画骨子（案）ですか。

○事務局：そうです。こちらのほうが第１回でいただいた皆様のご意見を成文化したものになっております。よろしいですか。

○山本委員：はい、大丈夫です。

○事務局：それから第３点目ですね。観光資料第８号と書かれたものでございますけれども、こちらは前回ご検討いただきました事業（案）に加え、シートでご提案いただきました事業を整理したものと、現在区で実施している事業を整理したものでございます。また、本日配付資料の３点目、少し厚い表になっているものでございますけれども、こちらは文京区アカデミー推進計画調査報告書のライフスタイル分析について。調査報告書の中ではタイプ名が入っていなかったかと思うんですけれども、タイプ名を付け、考え方をまとめた説明を作成しましたので、計画の策定および今後の事業進行のための基礎資料としてお使いください。以上でございます。

○野口座長：ありがとうございました。では本日の次第に沿って進めていきたいと思うのですけれども。配付資料にあるとおり観光分野の体系図、それから分野別の計画骨子、それから観光分野の事業（案）について順次検討していきたいと思うのですけれども。最初に資料の第６号、観

光分野の体系という資料です。これについて事務局からご説明をお願いいしたいと思います。

○事務局：それでは、今お手元にございます観光資料第６号と観光分野の体系についてご説明をさせていただきます。もし、お手元に観光ビジョンをお持ちの方がいらっしゃったら、それと照らし合わせながらと思います。前回の会議におきまして、皆様に観光ビジョンで昨年度策定しておりますものをご紹介させていただきましたけれども、今回アカデミー推進計画を立てるにあたりまして、観光分野の分科会におきましては、こちらの観光ビジョンにのっとって進めていきましょうというお話になったかと思います。こちらの柱ですとか施策、こちらにのっとってこれから観光分野で取り組んでいきます事業の中身を皆さんにご議論いただいているかと思っております。ただ、皆さんにご議論いただいている中と、ほかの分科会との整合性ですとか、あとはこれを策定してから、若干ではありますけれども、少し時間も経っておりますので、より良い計画にしていきましょうということもございまして、見直しができる部分があれば見直しをしましょうということで、議論をさせていただいた結果を本日お持ちしております。

中身についてご説明をさせていただきます。まず観光ビジョンにおきましては、取り組みの柱ということで６つ掲げてございました。まず１点目が「まちあるきを中心とした資源の発掘・活用・創出」、そして取り組みの柱に、もし冊子本体をお持ちでしたら 48 ページにございます。取り組みの柱２が「まちあるきのための環境整備」、そして３本目が「まちあるきを通じた交流の場、機会の創出」ということで６本、柱が立ててあるかと思います。それを今回アカデミー推進計画用に、若干入れ替えをさせていただいております。修正してありますものが、上の表です。

大きく変わっているところは柱６本あったものが、まず４本になっているという点です。こちら下のほうに相違点ということで書かせていただいておりますけれども、まず①のところにビジョンの柱２と柱３を１つにまとめております、という点でございます。上の表を見ていただきますと「まちあるきや交流のための環境づくり」というふうになってございます。前回の観光ビジョンにおきましては、取り組みの柱２がまちあるきのための環境整備、取り組みの柱３がまちあるきを通じた交流の場、機会の創出というふうになってございました。中身を見てみますと取り組みの柱２が主にハード整備といいますか、環境を整備していきましょうというもの。柱の３がそういったものを活用しながら、区民の方、もしくは来訪者の方が交流できるような機会づくりをしましょうというような中身でございました。ですので、柱２と３を統合する形で、まちあるきや交流のための環境づくりという形で１つまとめております。

その次にあります施策に関しては、柱２と３に入っているものをこの中にまとめて入れております。ただ１点、取り組みの柱の２に観光ビジョンでございました「区民の生活に配慮したまちあるきの仕組みづくり」というところで、観光施設に訪れる来訪者が区民の生活にちょっと悪影響を及ぼすようなところがあると。人が多過ぎて生活がしづらくなってしまうというような問題があるということで、このような施策が入っていたのですけれども、そういったものは、ここの中に施策と設けるわけではなく、すべての事業とか、すべての取り組みにおいて配慮していきましょうということで、すべてに掛けるような形で、あえて柱とか施策としては立てないという形で整理をさせていただいております。

次に相違点②ですけれども、柱の３において「観光まちづくりのための情報発信」という中身があるのですけれども、そこの施策（１）、こちらが観光ビジョンでは取り組みの柱４で「文の京に関する情報収集発信機能の強化」とあったのですけれども、前回の分科会におきまして、皆さんから文京区の知名度アップ、イメージアップということを図っていく必要があるのではないかというご意見をたくさんいただきましたので、施策の名前を「文京区の知名度向上へ向けた情報発信の強化」という形で言い回しを変えさせていただいております。

３点目の変更点ですけれども、観光ビジョンの中には柱６として「観光推進体制の構築」というものが入ってございました。ただ、今回アカデミー推進計画をつくるにあたって、国際ですとか、スポーツといったようなほかの分科会におきましても、このような体制のお話は出て来るということになりまして、全体の計画の中でこういう体制に関しては書きましょうというお話が今挙がってございますので、観光の分野からは、柱としては体制を外すという形で今検討を加えて

おります。ただ、柱の中に「観光まちづくりのための人材育成と体制づくり」という形で意味合いとしては持たせるような形にしていまして、施策の（４）に「さまざまな主体が連携して取り組む体制づくり」というような形で体制のことも観光分野の中で取り扱える部分に関しては取り扱うというような形で修正を加えております。こちらの体系の説明は以上です。

○野口座長：はい、ありがとうございます。前回の分科会でもお話があったみたいに、既にこういった観光ビジョンというのがありますので、これに基づいて今の体系というのを調整、これに基づいてさらに熟成させたという、もしくは今回のアカデミー推進計画策定協議会という枠組みにふさわしいような形に、少し体系をあらためたという、そういうニュアンスだと思います。

では、次は第７号の資料です。これは今の体系に基づいてこちらの骨子（案）というのがあるわけですけれども、こちらの説明も合わせてお願いしたいと思います。

○事務局：では引き続いて第７号の「分野別計画骨子（案）観光分野」こちらにつきましてご説明させていただきます。お手元に２～10 ページに渡りまして資料があるかと思いますけれども、こちらが、アカデミー推進計画の中の文章という形で最終的に取りまとめのイメージとなっているものでございます。では、中身についてご説明をさせていただきますが、今回、こちらの内容をすべて説明する時間がありませんので、どのような形でこちらが作られているかという構成の部分を主に説明させていただきます。

まず２ページ目ですが、こちらに目標とか基本方針、タイトルと書いてありますけれども、基本的には観光ビジョン、前回策定しております観光ビジョンのものを抜き出しております。その下に米印で参考とございますけれども、今、文京区において策定しております基本構想に観光分野が設けられているのですけれども、そちらで将来像を定めておりますので、ご参考までというふうに設定しております。こちらを設けている理由ですけれども、皆さんに、観光ビジョンではこのような考え方に基づいたということですとか、文京区全体の計画となる基本構想では、観光分野ついてどのようなとらえ方をしているかといったところを少し念頭に置いて、事業とかを考えていただきたいと思いまして、参考までにこちらを載せております。

では、３ページ目から中身に入っているのですけれども、こちらは今、資料の第６号でご説明をしました柱ごとに現状と課題、それと基本的な方向、そして期待される効果という形で内容をまとめていっております。今回出している資料には載っていませんが、本日こちらの後にご説明をいたします第８号の資料の観光分野の事業（案）一覧で事業が書いていますが、そのまとまったものが、この後に載せられる予定になっております。事業につきましては、今ほかの分科会とも合わせまして体裁とか中身の内容などを検討していますので、そういったものが固まり次第、またこちらのほうに反映していくという流れで考えております。

まず、その現状と課題というところですが、柱１、２、ありますとおり「まちあるきを中心とした資源の発掘・活用・創出」ということがございますので、これに関連する現状と課題をまとめております。冒頭にも区のほうからもご説明がありましたけれども、現状に関しては、今区で発行してあるような観光パンフレットとかくのホームページ、または区でまとめている統計データ、あとは観光ビジョンを作るにあたって実施した区民や事業者に対するアンケート結果、そういったものと、皆様からいただいておりますようなご意見を取りまとめて、現状が今どうなっているか、またそういった現状を踏まえて、文京区の観光分野の抱える課題はどういうものかといったようなことをまとめていっております。

例えば柱１についてですが、柱１の現状ということでは５つ大きく黒丸で書いております。柱１の内容が資源の発掘とか、活用・創出というようなテーマになっておりますので、現状としては１つ目の黒丸にあるように、まず文京区には全国に誇れる歴史的な文化・資源、そういったものが数多く点在しておりまして、黒丸の２つ目にもあるように、そういった資源を生かして文の京のミュージアムネットワークですとか、大学と連携したような取り組み、そういったものが非常に進んでいるというような現状がありますと。黒丸の４点目にアンケート結果というものを載せてございますけれども、区民や区内事業者、来訪者に対して平成 21 年にアンケートを実施して

おります、そういった結果の中でも歴史や文化の香り高いまち、または大学など教育機関の多いまちというイメージが文京区の中にはしっかり根付いているというようなことがあるというような現状をまとめております。ただ、そのような良い点ばかりではなく最後の黒丸にあるように、数多くある資源とか、そういった資源が持つ歴史的な背景というものが区民や来訪者へ十分に伝わっていなかったり、それらの資源を楽しむための仕組みができていないというような問題ですとか、あとはそういったような観光資源を楽しむ際に、区民の日常生活エリアに立地しているために、区民生活への悪影響が懸念されているようなものもあります、という問題点も抱えているという現状をまとめております。そのような現状を踏まえて、では、これから文京区ではどのようなことに取り組んでいくべきかという形で課題を、ここでは４点まとめております。

その４点というのが、先に申し上げました体系の（１）（２）というものと対応してございます。例えば課題①では、既存の資源の認知や魅力向上を初め、新たな資源の発掘・創出を図っていくことが求められるというところがありますけれども、こちらがその下にあります基本的な方向（１）「文の京の誇りとなるまちなかの魅力発掘と磨き上げ」へ対応していってございます。このような課題を抱えているので、その課題を踏まえてこのような取り組みをしていきましょうというような流れで、この資料がまとめられております。例えば今申し上げました①（１）というところでは資源の発掘・創出を図っていくということに関してまして、具体的には（１）のところに黒丸で１つ文章を書いておりますけれども「本区の魅力をさらに高めていくために区民自らが地域の魅力を発掘し、魅力を高めていく取り組みを推進します」ということで具体的な取り組みの方向性を大枠で書いております。冒頭で申し上げましたとおり、これから皆さんにご議論をいただく事業、こちらをこの基本的な方向とかが並んだ後に、具体的にはこのような事業をしていきますというようなものを、これに加える形でまとめてまいります。

今、柱１の基本的な方向の（１）というところまでお話をしましたが、具体的にこういう取り組みをすることによって期待される効果もまとめております。３ページの一番下に書いてありますけれども、例えば「魅力発掘の取り組みをすることによって、歴史や文化的な資源の魅力向上により新たな観光客の誘客や文京区のイメージ向上が期待されます」ということですとか「本区の魅力に対する区民の認知拡大や観光まちづくりへの参画の促進により、区民の区に対する愛着や誇りが高まることが期待されます」というような形で具体的な事業の効果もまとめております。

このような形で柱１～柱４に関して、それぞれ現状と課題、またはそれを踏まえた上でどのようなことに取り組んでいくかという基本的な方向をまとめております。説明は以上です。

○野口座長：ありがとうございます。皆さんには、この資料を事前にお届けしていると思いますが、どこまでじっくり読んでいただいたか分からないのですけれども。第１回目の分科会でも皆さんにご議論をいただいたわけですけれども、それを事務局さんのほうで、私も一部かかわりましたけれども、まとめたものが今ここで説明いただいた２種類の６号と７号これが資料となっているわけです。今、ご説明いただいたこの２つの資料について、ご質問も含めてご意見、付け加えるべきもの、その他お気付きの点があれば、議論したいと思います。

○市川委員：分野別計画骨子（案）、観光分野、観光資料第７号の一番下にあるアカデミー推進計画の観光分野部分におけるといって、記載されるのはタイトルのみのタイトルはどこにあたるのですか。

○山本委員：これじゃないですか。タイトルっていうのは、この行ってみたい、来てほしい文の京、これがタイトル。

○市川委員：このタイトル、つまりこの全部。それとも。

○野口座長：このタイトルっていうのは、どこをタイトルっていうわけ。

○市川委員：タイトル、理念、ビジョンからここのことですか。

○野口座長：行ってみたい、来てほしい文の京。

○山本委員：ええ、この四角も入るのですか。参考というの、そうすると。

○事務局：入りません。参考までに掲載させていただきましたということです。

○市川委員：ということは、行ってみたい、来てほしい文の京だけが入るということですか。

○事務局：ほかの分科会との絡みもありますので、まだ予定という形で、細かいところではあるのですけれど、また変わることもありますので、その辺はほかの分科会もみてということで。

○市川委員：はい、すいません。あと３ページ、今まで説明いただいてありがとうございました。それで分からなかったのが１、現状と課題の番号はついてないのですが、丸ポチの５番の一番最後、区民生活への悪影響も懸念、どんなことを懸念されていたのでしょうか。

○小野委員：区の観光資源というのは、その多くが生活の場の中にあるのです。そこに多くの人が来てワーッと騒いでいて、住んでいる人が迷惑しているということもある。

○市川委員：騒音とか、そういうことなのですか。物を壊すとか。

○小野委員：マナーの関係ですよね。

○市川委員：マナーの問題。

○上田委員：うちの地元でも伝通院というお寺がございまして、あそこを使って、少し歴史散歩みたいなのをやろうかという企画を立てたのです。あそこの住職の麻生さんという方がいまして、うちは観光寺ではないと。檀家がいっぱいいらっしゃるのでやめてくれと。

○市川委員：やめてくれは事実なの。なぜそうおっしゃったのですか。それがここのことなのですか。

○上田委員：まず昨年「朝顔・ほおずき市」やったときに、本堂の階段に腰掛けて焼きそばを食べたり、それから千姫の墓の前でごみを落とされたりというので、うちの担当者が全部後始末はしているのですけどね。そういう目撃をしたのが気に入らないと。今回はパトロールをちょっと入れまして、使わしてもらえるようにお願いしているわけです。

○市川委員：そうですね、それはマナーというよりも管理者の問題かもしれないですからね。あと、もう１つ、基本的な方向の（１）文章の一番下に、魅力を高めていく取り組みを推進します、この「推進します」の主語は「文京区が」でよろしいのですか。それとも区民自らが推進します。

○小野委員：ここは「区」がですね。

○市川委員：「文京区」がですかということは、取り組みを文京区が推進しますと読んでいいということですか。

○小野委員：そうですね。区がまず、最初のとっかかりなのですね。

○事務局：すべて、文京の観光は基本的に行政ももちろんかかわりますけれども、区民、商店街の皆さん、学びに来ている方、皆さんで推進していきましょうというということがまずありますので、この推進しますっていうのは、すべての人にかかわってくると考えていいのではいいないかと思いますが。

○市川委員：それだと、すべての人だと、これはどうやってすべての人に。各家へ配付されるってことですか。

○事務局：そこのところが、実は区民の皆さんのおもてなしの心を醸成するというところが最後のほうに出て来るのですけど。

○市川委員：それも醸成するのは、やっぱり主語がいるのです。それも全員がなるのですか。要は旗を持っているのは誰かっていうのを知りたかったのですよ。

○事務局：旗を持っているのは基本的には行政だとは思うのですけれども。ただ事業を推進していくところはみんなでやっていきましょうと。ですので、取り組みを推進するときには行政だけではなくて、みんなでやっていきましょうというところなのです。

○市川委員：僕は文京区が推進するけれども、つまり文京区はボールを投げるけれども、波紋を広げたときに、その波紋を拾ってくれるのは区ですよ、区民ですよとか、いわゆるその辺のステークホルダーですよというふうに読めばいいのかなと思って、文京区ですねと念を押したのですけど、そうじゃないとするとみんなでワーッとやりますという意味なのですか。

○小野委員：それはないです。区民自らが地域の魅力を発掘しというのは、やっぱり誰かが発起人となってやっていきましょうと、投げなきゃいけないのですよね。そうするとやっぱり区が、まず先頭を切るという気はしますけれども。

○市川委員：そう読むのが自然かと思ったのですけど、違うのであれば分かんなくなって。

○小野委員：ただ、思いとすればみんなが主役であって。

○市川委員：ええ、それは分かりますね。

○小野委員：やっていきたいっていうのがうまくというのは。

○市川委員：気持ちは分かるのですけど。

○小野委員：表現としていいのか。

○野口座長：何ていうのですかね。魅力を高める取り組み、取り組むのはみんなが取り組むと、そういう状況を推進する、取り組むのはみんなが取り組むのです。それぞれみんな思いがありますから。例えば観光協会さんの思いもあれば、商店街の思いがあるし、それからほかの地域ではまちづくりＮＰＯというのもあるのですね。そういうところの思いもある。それから地域の歴史みたいなところに携わっている人はその人たちも思いもある。それぞれの取り組みがあるのだけれども、全体としてここに書いてあるような本区の魅力というところにつながっていくように推進する、これが区かもしれないですね。しかし、取り組むのはみんなで取り組むと。

○市川委員：それなら非常に分かりやすいですね。そういうふうに解釈すると。ということは区民自らが地域の魅力を発掘すると歴史や期待される効果、歴史や文化的な資源の魅力向上につながるのですか。

○小野委員：魅力向上につながらないですか。

○市川委員：質が上がるっていうことで面積が広がるわけじゃないのですよね。この魅力向上というのは面積が広がるってことを言っているのですか。

○小野委員：魅力の数が増えるかもしれない。

○市川委員：数は増える、量は増える。質はどうですか。

○小野委員：質も上がるかもしれません。そこまで知らなかったのがこの人に聞いたことによってもっと知れたとかもあるかもしれないし。

○市川委員：ということは地域の魅力というよりも、新たな魅力ということなのですかね。発掘っていうのはそういうことなのです。

○小野委員：発掘ってそうですね。

○市川委員：既存のものでも新しい付加価値が見えてきたというふうにとらえればいいのだと。

○小野委員：それでよろしいでしょうかね。そこの表現はいろんな意味を含んでいると。

○山本委員：網羅している。

○小野委員：いろんなことを網羅している。

○市川委員：いや、いいのです。どういう意図があったのかをね、思いがきっとあると思うので、ま、のんべんだらりと書いてはいないと思いますから、思いを知りたいのですが。

○野口座長：この背景にはやっぱり文京区さんの、例えばほかの観光でご飯を食べているようなエリアみたいに、明確に温泉でやっていくしかないのだとか、寺社仏閣でやっていくしかないんだみたいな、そういう明確な中心的な観光資源があって、それを押し進めるしかないってはっきり分かっているところは、温泉組合が中心となりとかって、書いてあってもいいと思いますけど。前から申し上げているみたいに、観光もやっている文京区だと思うのですね。ですから、そういう意味では必ずしも誰か１人がどんどん進めるとか、中心があるわけではなくて、むしろいろんな取り組みがあって、それが例えば区役所のいろんな取り組みで、例えばＡとＢという２つの取り組みをやっているものが橋渡しがなされるわけです。それで全体として魅力がより上がれば相乗効果という言葉もありますけど、そういうことを調整役というかコーディネートというか、そういうようなニュアンスで役所は存在すべきでしょうし、明確なリーダーシップを持っているとか、産業規模的に例えば旅館が一番声がでかいとか、そういう状況じゃないと思うのです。そういう意味では逆に言うと、こういう書き方のほうが、皆さんがとにかく主役なので、そういうことになるのだと思うのです。

○市川委員：さっと読むと分かるのですけど、ちゃんと読んでいくと主語は誰で、何のためにとか、目的語はどれでというと分かんなくなってきて、そう読まないで、ただ、先生がおっしゃっ

たように背景があるから、その背景を踏まえて読めばいいのではないのということですかね。

○野口座長：そうですね。時間的な経過って考えると、現段階ではこれでいいのではないかと。例えばこの文章の中で、今後どういうことは誰が担うのかとか、役所は何を担うのかという役割分担を今後検討しましょうとだけ書いておいて今は決めないとか。そういうことでいいかなと思うのです。今、ここの計画レベルで、誰が司令塔になってとか何とかっていう、そういうところまで踏み込めないと思うのです。ですから、進むべき、あるべき完成形というか、未来の姿みたいなところを見せておいて、そこにどんなふうにアプローチしていくかっていうのは、残念ながら今回はすべて網羅できるわけじゃないので、その役割分担を考えたり、官・民・産・学、どういう役割分担をしていくのかっていうことは、今後検討していくべきであるとどこかで書いておけばいいのかなと思います。

○上田委員：最初の資料の６号に載っている４番、観光のまちづくりのための人材育成というと、かなり具体的に出しているじゃないですか。ＮＰＯ団体を作れとか、ホスピタリティでしたら商店街の活性化とか、魅力を伝える人材といったら歴史散歩の何か、例えばふるさと歴史館にいらっしゃるボランティアとか、そういうものの育成まで踏み込んでいますから、もう完全にリーダー的な人をこれから育成していこうという気持ちが役所のほうでは出ているわけですよね。こんなにはっきり書いちゃってもいいのですか、本当にやらなきゃいけなくなっちゃうのですよ。

○小野委員：実際、これは観光ビジョンの中で書かれているものを基本として作っていますので、具体的施策、これ、資料６号では施策と書いてありますけど、そこの下に具体的施策を作っていくのですけど、そこには案として、それができれば出していきたいということなのです。

○上田委員：ＮＰＯを立ち上げるのだって費用掛かりますよね。本気でやったらこれは大変なことになりそうです。

○野口座長：理想を言うと、役所に全然関係ないところでＮＰＯはできて、役所にものを言うようになると理想なのです。だから役所がかかわってＮＰＯなんていうことはうさんくさいので。うさんくさいって変ですけど、そんなことはあるべき姿じゃないので、ほかのまちでうまくいっている例のように、やっぱり市民の人たちが思いを持って、思いを達成できないからＮＰＯをつくるわけで、そういうものが参加者の主役の１人として、１つとして出てきて、それをまたみんなで調整していこうと。だけどトータルとして進むべき方向はこうだねというのは示さなきゃいけないので、人材育成というのは、主役作りとはイコールでもないような気もするというか。それにかかわっている１つの要素だと思うので、ただそこにかかわっている人はみんな、できれば同じ目標を共有したいねというところが、ここでまず考えなきゃいけないことだなと思うのですけど。

○上田委員：実は先生の今のお話を聞き出すための、今のような話なのですけど。本郷で今ＮＰＯ団体を立ち上げているのは環境問題から商店街まで、それから市民と生活者とグループになってＮＰＯを立ち上げているわけです。その中に、例えば東京大学のさくら咲くというテーマを販売とか受験生に対するアピール、お汁粉を出したりして。そういうような運動の中で地域のインフォメーション、その役割もしていこうというのが、今あちらの考え方なのです。だから今先生がおっしゃったことと同じようなことを立ち上げているわけです。そういうような民間のほうの努力をもうちょっとこの中で具体的に書いていただければみんな張り切ってやってくれる人が増えるんじゃないかなと。「うちでもそういう形で入ればいいんだな」という切り口なわけです。

○野口座長：まさにそういうことだと思うのです。ここに書くということは、役所は何やるってことを書いているのではなくて、区の中でそういう動きが起きるということを期待していますと

いうことだと思うので、もし、そういうことが起きているのだとすれば一番望むべき、望まれる状況だと思うので、そういう環境を作っていくということなのかなと思うのですけど。

○小野委員：良いパートナーシップが取れれば一番いいですよね。

○野口座長：そうですね。

○市川委員：すいません。今、区として何かを進めていこうということではなくて、とおっしゃったのはどういう意味なのでしょうか。区としてどうこうしようということではなくて、まとめていく、書いてあることはとおっしゃったのは、区として何かをしよう、どうこうしようという意味ではないというのはどういう意味なのでしょうか。

○野口座長：つまり、区がすべてをやろうとしているわけではなくて、時に調整役であり、１つのプレーヤーでもあり、だからすべてを動かしてやろうということではなくて、全体の、みんなが共有する目標というのは管理した方がいいと思うのですけど。具体的に管理するというところまでは、現段階では盛り込まれてもないですし、現状やる必要もないかなという認識だということです。繰り返しになりますけど、それでご飯食べているところは、役所もそれに向かって、みんなでそっちへ向かっていくので、そういう状況じゃないですよねっていうことなのです。

○市川委員：逆に言うと、そういう状況には文京区はしないと言っているのですよね。

○野口座長：するとかしないとか言っているわけではなくて。

○市川委員：そういう方向ではないということですか。例えば、伝通院さんの方はやらないと言いました。でも周りはやりたいと思っている。じゃあ、周りで盛り上げて、伝通院の協力が得られないかという動きはもうしないということ。文京区としては支援しない。

○上田委員：いや、していますけど、中々前へ進まないだけ。

○市川委員：皆さん、されているのですね、地区の方は。でも、区としてはそんなのは知らないよということ、極端な言い方をするとそうなっちゃうのですけど、そういうことなのですか。

○野口座長：やるやらないをゼロかイチという話じゃなくて、その主体になるわけじゃないよということです。当事者になるわけじゃないよということです。

○市川委員：当事者になるわけではない。でも、当事者になるのもきっとあるのですよね。

○野口座長：そう、もちろんあると思いますよ。

○市川委員：それは、この文章ではあいまいにしますということですね。

○野口座長：なぜかというと、文京区さん自身がプレーヤーの１つになって、すべて 100 パーセントやるわけじゃなくて、何かの１つの役割分担の中で役所という存在があるだけで。

○市川委員：ということは、主語は明確に今回はしないということですよね。

○小野委員：推進しますという表現が誤解をまねくのですかね。

○市川委員：みんなでやりましょうと。つまりみんなでやるってことは、共同責任ってことは誰も責任取らなくていいってことですよね。連帯責任って無責任ですからね。誰も責任取らないというふうに捉えちゃいけないってことなのですね。僕の捉え方がいけないと思っていいのですか。

○野口座長：いや、いけないとかそういうことではなくて、この計画の在り方の問題なのです。オーバーに言うと、責任というようなことが発生するようなものにするのか、それともみんなで目標を管理しましょうということなのか、ですよね。

○市川委員：目標を立てるということは誰かが、当然管理されるものがいるということで、管理する人と。

○野口座長：そうですね。目標については。

○市川委員：ということは目標を立てる人と、やる人と、チェックする人といるってことですよね。いないと役割として、人じゃなくてもいいのですけれども。そういうことは誰になるか分からないけれどもやりましょうと言っているにとどめるという立場にするということですね。

○小野委員：これは基本的な方向になるので、具体的になった時、見守っていくわけですね。そして、今後はこういう事業にしていきましょうと。

○野口座長：だから、チェックする側、される側という、そういう関係ではなくて、チェックする人もされる側も、下手したら同じ人になるかもしれないし、みんなでチェックしていかなきゃいけないので。まずは調整しなきゃいけないですよね。

○市川委員：調整はいいのですけど、する人とされる人も同じはまずいと思いますけどね。

○野口座長：いや、全く同じというか、同じ参加者が入っている可能性というのがあるわけですね。何なら調整しなければいけない。今の寺社仏閣の考え方と住民の考え方が、もしずれているとすれば目標に向かって調整しなきゃいけない可能性があるので、それを調整したことで目標が達成されるのだったら調整すべきだと思うので。

○市川委員：それはそうですね。それと、検査されるとする方というのはあまり関係ないように思えるのですけど。

○野口座長：数値目標が、もし設定されるのだったらそうですよね。だから数値目標にされるのかどうか、ちょっとここでは聞いてないので。あくまでこれは、方向性は右ですね、左ですね、といったらこっちの方向ですということを決めているだけで。

○市川委員：はい、理解しました。ありがとうございました。

○上田委員：数値目標まで踏み込むのですか。

○市川委員：できるだけ数値目標をすると言っていました。

○小野委員：具体的施策の方の事業例では、数値目標を定められるものは例として定めたいとは思っています。それが実際に事業として展開する際には、今回例えば 100 点のものを作ったのにお金的には 80 点までしかできないと。ということは 80 点のやつで、またそれを参考に数値目標別に作るしかないでしょうね。

○上田委員：100 点の方に行くまでのバックアップをするということはしないのですか。

○小野委員：100 点ができるように予算があれば一番いいのですけど。そこは事業として先行的には 80 点でもいいからやりましょうとなれば、その予算でやる。その時にはまた別の同じような目標ですけれども別の指標を使うかもしれないです。

○上田委員：いや、行政のバックアップの仕方なのですけど。先ほども先生から話のように、大体こういうものはまた民間から立ち上がって来るのが多いわけなのです。何しろ自分の生活でありその現地で事業をしている、お店を開いているとか事業をしている生活者が自分の生活のために立ち上がるわけです。観光事業とかそういうものは。いかにお客さんをいっぱい集めるかがメインですから。それが観光に繋がっているわけです。何を売りにして、そこに人を集めるかがテーマですから。それに対し、数値目標を作って何人くらい集めたいと。集めるにはどうしたらいいか、何かお祭りをしなきゃいけないとか、そういう形ですると、現場の方の予算と考え方の理想的な形の予算と乖離が出てきますから、そのバックアップをするとか、それのインフラを作ってくれるとかするのですか。

○小野委員：様々な段階で観光にかかわる事業をされる時に、当然区として後援して、協力していきたい事業だということであればバックアップ支援というのは惜しまないと思います。ただ、そこにはやっぱり予算というのがあるので、どの程度というのは、またその段階、段階ですね。ですから今、多分上田委員がおっしゃっているのはＮＰＯとか何とか、地域の団体の皆様が活用するというときに予算的なものが足りないとか、それをぜひ援助してほしいという時に。

○上田委員：ここまでやりたいという気持ちはあるのですよね。ですけど、それができない場合は、行政がそれだけのカバーリングをしてくれるのかどうか、それもまだ数値目標ということは、そこに数値をここに書き込むのかどうかですよ。

○小野委員：多分、それは難しいでしょうね。

○上田委員：書けない。だから、その数値目標なんて書けるのですかって。

○小野委員：主体となって行政がするやつだったら設定できる、設定しやすいですよね。あと例えば観光協会さんとか、区と直結しているようなところも、やる場合には設定しやすいというのがあります。設定しやすいものとしにくいもの、目標としてどういう形で挙げられるかというのはそれぞれ変わってくるだろう思いますけど。

○上田委員：だから主語が「文京区は」という主語になった場合は、本当にホスピタリティは文京区が持つしかないですね、そういうことに対しては。

○小野委員：そんなことはないですよ。本当に例えば。

○上田委員：いや、事業に対するホスピタリティです。お客さんじゃなくて。事業を行う団体に対するホスピタリティを行政が取っていただいければ。100 パーセントおんぶに抱っこなんて考えませんから、どうせ。

○野口座長：ほかでは行政が「ちょっと手伝わせてくさいよ」と言っても「いや、結構です」というところもあるのです。市民運動の方が行政に口出しされたり金出されたりすると身動き取れなくなるからお断りというところも実はあって。ですから、そういう意味では区は区じゃなきゃ

できないこと、民間は民間じゃなきゃできないこと、市民運動は市民運動じゃなきゃできないことっていう、それぞれの得意分野を生かすというか、時に手を組んでやらなきゃいけないということだろうし、そういう関係になれたらいいですよね。そういう意味でも、みんなと同じ方向を向いて頑張った方がいいと思うのですね。あといかがですか、皆さん、ほかに。

○山本委員：この柱の４つ目の「観光まちづくりのための人材育成と体制づくり」文京区さんは人材の発掘はすごくされていると思うのです。現にインタープリターさんがすごいですよね。英語観光ボランティアの方々もそうですが、ただ、活用がまだ弱いので、活用ノウハウというのですか、これをぜひ考えるだけじゃなくて、即実践、さっきもお願いしたのですけど、集めて、観光ボランティアさんやる気満々ですので、今がチャンスかなと思うので。その発掘は本当にすごいと思うのですよ、生涯学習司の方とかすごいですからね、あとは活用、これを即実践していただけたらと思います。

○野口座長：これはほかの地域でも非常に頭の痛い問題なのです。

○山本委員：そうなのですか。

○野口座長：やりたい人は５万といるけども、いざそれを組織化して、本当にニーズに合わせて派遣しようかというと「いや、膝が痛い」とか「腰が痛い」ということもありますし。

○山本委員：ボランティアだからですか。

○野口座長：予定が合わないとかで、結局うまくいかなくて。そうすると、いつも同じ人に頼むことになる。だいたいそういうパターンです。

○山本委員：じゃあ文京区はすごいですね。サポーターさんもシステムを重ねていて、私もやらせていただいていますけど、どんどん登録して。見ているとうまくいっているほうじゃないですかね。

○小野委員：まだまだ。

○山本委員：あ、そうですか、すいません。

○野口座長：結構うまくいっているところは、ボランティアガイドとかボランティアの人たちの中にもランク付けをしたりとか、そういうことを色々やっているのです。京都はその典型例ですけど。そういうことをしたり、指導役という人を何人か作ってピラミッドにするとか、そういうことをしていかないと、みんなが平等だというと、質も落ちたり、要はみんなのやる気も、ずっと同じモチベーションでできなかったり、責任を感じなかったりするようになるので、むしろ活用の前に本当は組織体制を作らなきゃいけないのですけど。それが一番の課題ですね。

○山本委員：分かりました。じゃあまだまだですね。なるほどね。

○小野委員：組織体制を決めずに走り出したということがある。

○市川委員：ものすごい矛盾が出ていますよ。

○山本委員：現場でもみんな、本当に私たち、講義を受けるだけさせられて、どうなっちゃうのという声は学習司でも、サポートさんでもなんでも、インタープリターさんは見事に自立されつ

つあるので。

○市川委員：じゃ、それも問題だと思うのですけど。だってインタープリターはインタープリターで、サポーターはサポーターで、単独でやっているわけですよ。そういったのを文京区としても何かしておかないと勝手にベクトルも全部バラバラで。

○山本委員：でも自覚されていますから、きっと大丈夫ですよ。それはお分かりみたいだから。

○小野委員：はい。

○市川委員：ベクトル、あってないですよ。

○野口座長：ちなみに「東京シティガイド検定」という資格試験があって、私かかわっていて問題作っているのですけど。そこで東京シティガイドクラブというのがあって、その皆さんは、はとバスさんのアウトソーシングで、入谷とか、谷根千エリアのガイドをやっていて、非常にやりがいを感じていらっしゃるみたいです。そういうのもやっぱり、ある程度事業化というか、そういうのができないと、経済ベースとまでは言わないですが、何か定期的な京都のボランティアガイドもそうですけど、やっぱり１個所にホットラインがあって、そこに情報が集約されていないと、使い勝手が悪いと駄目とか、ということがあるので。これはできるだけ役所がやらない方がいい、僕はどちらかというとそういう立場の人間なので、むしろ民間向いていた方が、民間に使い勝手いい方がいいのではないかと思うタイプなので、むしろ旅行会社などと仲良くするような方法を考えた方がいいのではないかと、僕は思うのですけれども。

○小野委員：今は英語観光ボランティアガイドと、観光ガイドというのを養成しております。それは観光協会さんに事務局をやってもらうシステムで動きだそうとしています。そうすれば問い合わせがあった時に、観光協会さんに出していただいて。

○山本委員：そうそう、出ていましたもんね。

○市川委員：京都のボランティアというのは無償、本当のボランティアなのですか。

○野口座長：それはランクがあって、お金を取れる人と取れない人がいるわけです。

○市川委員：やはりそういうこと。まるっきりボランティアで長続き、個人だったらしないと思いますよ。

○野口座長：ええ、だから、そこがまた問題で、そこまで踏み込むと、その仕組み作りが大変、会計処理も大変だし。だから京都なんかは、それをやってもいいぐらいのニーズがあるので、やっていると思うのですけど。あとは熊野古道では、熊野古道を案内する人がいて、やっぱり名物ガイドがいるのです。その人に会いたくて行くという人がいるぐらいなので。

いかがですか。あとは考え方なのですけど、６号資料の一番下、削除という表現なのですけど、実際は４番のほうの柱に少し入れたわけですね。削除という言い方でいいですかね。あと、もう１つは７号のほうの３ページ目の、先ほどお話があった区民生活への悪影響も懸念されるとか、４ページ目の住民の暮らしに悪影響が出ないように配慮しますという何かちょっと。だから観光の計画書としてはこういう言い方はしないほうがいいのではないかと。

○小野委員：これは変えさせていただきます。

○野口座長：ただ、素晴らしいことに気付いていると思うのですね。逆にこれに気付かないで、やったらクレームだらけっていうまちもたくさんあるのです。なので、最初からこういうことが起きるかもしれないね、ということをここに書いてあるというのは素晴らしい目配りでいいと思うので。これを生かすのであれば、例えばこれはありきたりの表現ですけど「持続可能な仕組みを考えます」とか。何かそういう始めるだけじゃなくて、始めながら持続可能な、みんなが協力してくれるような雰囲気作りをしましょうとか、そういうような考え方というのですか。だからみんな最初は違和感があるのですよ。だけど、だんだん慣れてくるというと変な言い方ですけど、それもみんなが理解すれば仕方ないなと思えるところもあるかもしれないし、いや、むしろこれじゃ長続きしないよというのであればルールを決めようということになるので、そう意味ではみんながずっとこういう観光とか、そういうことをキーワードで人々が交流するという仕組みを文京区の中で長く続けていくためには「持続可能な仕組みというのを考えます」とか、そういうニュアンスでここの表現を入れておくと、この趣旨は生きるかなと思うので。

○上田委員：菊坂があまりにも強烈なのですよ。

○野口座長：削除というのも、ちょっとうまい表現じゃないと思うので。

○上田委員：金沢でもありますよ、この件で、武家屋敷ってあるじゃないですか。全員あそこに住んでいるのですね。観光用の建物じゃなくて生活の建物なのですよ。だから覗かれちゃ嫌な人はいっぱいいます自分の生活を。中を見てもいいよという家もあるし、絶対入れさせないという家もある、だから入口に紙を貼って、当家は何も見るものはありませんと貼ってあるのですよ。

○野口座長：そうですね。ちなみにＪＲさんがやっている「駅からハイキング」駅から歩いていくウォーキングですが、あれは物凄いスタッフ数を用意して、みんな外注ですけれど。参加者が曲がるのに、間違いそうな角々にはスタッフを立たせ、横断歩道を渡るところにも立たせて、いわゆる信号無視とかする人があるわけです。ウォーキングで急ごうと思って。そういうのを止めたりする、そういうマナー管理は、本格的になってきたらしなきゃいけない時は来ると思うのです。

○上田委員：それは１度やったのですよ。去年の春に、島田さんのところの江戸川橋のところで、会長のところ。「さくらタウン」ということで、文京区内、桜の名所をウォーキングして歩こうと。でスタンプラリーなんかやりまして、それで江戸川橋の地下鉄の駅から歩いていく。その案内は跡見学園の学生に頼んだ。結構あっちこっちイベント会場を出したり、案内を出したり、はんてんを着て案内をして、それでうまくいったのですけど。ちょっと寒かったけど、桜の時期は。大学生を使うと結構便利です。一応日当という形でいくらかお礼をしていますけどね。ほとんど100パーセントただみたいな扱い方をしていますけど。

○野口座長：６ページ、まちあるきは交流のための環境づくり、ここまで話していいですね。交流のための環境づくりというところもあるので、６ページの（４）の「まちあるきイベント等の推進」という書き方をしているのですけど、余りまちあるきばかり書かないで「一般イベントやまちあるきイベント等の推進」とか、一般のイベントも入れた方がいいかなと。やはり交流という部分があるので。まちあるきは、必ずしもまちあるきイベントがないとまちあるきしてもらえないわけじゃなくて、何か寺社仏閣があったりというもので引かれる場合もあるし、何かイベントがあるから、そこに向かって歩くという可能性もあるので。交流というニュアンスについては、まちあるきに余り引っ張られ過ぎないで、普通の一般的なイベントもやるべきだというところも入れておいた方がいいかなと思います。

　その下の「ＭＩＣＥの誘致」ですけど、ここに書かれているのはどちらというとアフターコンベンションのニュアンスですね。つまり、どこでその会議を開くかということはぼかしてあって、

会議をきっかけにして文京区を歩いてくださいとか、文京区でご飯を食べなさいと書いてあるのですけど。そもそも文京区で開いてもらった方がいい、文京区で開催するメリットというのもここに入れておくべきなのかなと。そういうことも検討しますと書いておくべきかと。沖縄は、ＭＩＣＥとか、イベントとかコンベンションの分野に一生懸命力を入れている所ですけど。要は「沖縄でやると効果が高いですよ」と一生懸命言っているわけです。例えば、チェーンレストランなんかで店長を集めてどこが一番売り上げよかったかなんて競わせるわけですけど、最後は表彰するのです年間で。表彰する時に、東京のどこかの居酒屋でやるよりは、沖縄の海が見えるようなところで華々しく表彰式をやった方が感動も大きいですね、自分頑張ったのだっていう。もしくは何か展示会を開くとか、ＭＩＣＥっていうのは色々なものを含んでいるわけですけれども、イベントをする時に文京区でやった方がメリットあるとどう思わせるかということなのです、それが何なのかということを検討すべきじゃないか。会議は文京区でやった方がいいということ抜きに、いきなり終わった後どうしますかと書いてあるので、イベント自体を文京区でやるといいよというところを強調したいと思うのです。そうでないと誘致できないと思うのです。もちろん終わった後楽しいよというのも大事な要素ですけど。沖縄は特にそうですけど、沖縄で開いてもらうために色んな努力をしているので。コンベンションセンターという大きなセンターがあるのですけど、そこは有名なデザイナーが造った施設ですけど、表彰しますね。何とか店の店長が今年の一番ですと拍手すると、音楽が鳴ってガラスのウインドーがパーッと開いて海がパッと見える。会場が展開していって感動のフィナーレみたいになるのですけど。そういう演出をするわけです。

○市川委員：宜野湾でしたっけ。

○野口座長：そうです、宜野湾ですね。それはものすごく感動的な演出ができるわけです。海が見えて。それは沖縄の自然とか開放感といったものがうまく生かされて「どうせやるなら沖縄がいいよね」と思わせるわけですけど、それみたいに文京区でそういうイベントを開くといいよねというのをどう思わせられるかというところですね。受入態勢。

○市川委員：宜野湾でコンベンションセンターを造ったというのは、あれは私営なのですか、それともある程度の行政の力。

○野口座長：もちろん行政も入っていますね。

○市川委員：ですよね。やっぱりそういうのがないと。

○野口座長：沖縄は、再三申し上げているみたいにあれで食っていかなきゃいけないので、行政も１つの産業としてみなしているので、一種の投資ですよね。その隣にホテルを造ったり野球場があったり。この間私が仕事で行った時はベイスターズのキャンプ中でしたけど。そういう一体的な開発は、逆に行政が線を引かなきゃいけない。だけど、やるのは民間がやるということですね。

○市川委員：文京区はよく分かんなくなってきたのですけど、ごめんなさい。多少分かりました。

○小野委員：ＭＩＣＥって非常に難しいですよ。

○市川委員：いや、ＭＩＣＥだけじゃなくて立場として、例えば、先ほどの例で伝通院さん、入っては困る。でも行政がやるのだと、だから伝通院さん協力してよと。多分吉祥寺なんかもそうなのですよ。行ってないですけど。後押ししてくれないと、多分絶対折れないですよね。

○小野委員：今、後押しの仕方として区が直接行くというスタイルではなく、せっかく今観光ガ

イドさんを育成していますので、その方たちの「ガイドが一緒に行くのだからマナーも良いし、色んな人によく情報を知ってもらえる、だから、ぜひガイドが行く時に開放してください」という形で付加価値を付けていけるものにしたいなと思っているのですけど。

○上田委員：それは区として。

○小野委員：ただ、区が行って「開いてください」だけじゃ、どうしても「どうするの」という話になるので、ガイドとしての事業で。

○市川委員：お寺さんにボランティアを要求しても、多分駄目なのですよね。ある程度見返りがないと。

○小野委員：英語観光ボランティアで吉祥寺さんに行った時には、本堂を開放していただいて、座禅組んだりやっていただいた。本当にお願いの仕方で全然変わってきますので、ですからガイドというしっかりした形を持って行けば、対応が変わってくるのかと思いますけど。

○上田委員：自分自身の格というものをある程度認識していますので、その辺をうまく利用するとか、その辺でマッチングして使っていくしかないかなと。我々は常にお寺というものは人がたくさん集まるところだという前提でものを考えていますから、いわゆる昔から公というものがありまして、昔から人がたくさん集まる場所というのはお寺しかなかったのです。他にないですからね。

○市川委員：神社っていうのがある。お祭り。

○上田委員：お寺は、人がたくさん集まるところ。人が集まらなかったらお寺ではないと。お寺さんも宗教法人になって、私的な部分もかなりありますし、その中で、こちらとマッチングができる部分がどの辺までかなという見切りをしながら一生懸命接触している状態です。

○市川委員：区とインディペンデントでやっているわけ。

○上田委員：いや、区は関係ありません。

○市川委員：ということは、独立されてやっているわけ。

○上田委員：行政が入るとかえって混乱する、さっきの話じゃないですけど。問題ができた時に、それこそ始末に負えなくなっちゃう。警察も同じですけどね。あそこの境内の前で今年も盆踊りをやるのですけど、伝通院の前で。道路使用不可の問題とか色んな話があって。今年の９月にはお祭りもありますから、かなり信号無視でみこしを通したりするのは、お祭りとしては常識ですから。我々も赤信号を何回止めてやるかというのは、前例でやって動いている部分も結構あるのですね、粋がってやっているわけです。白山通りの信号を３回止めたとか。それで変に満足しているような人がいますから。警察もプリピリしているわけです。その辺を何とか調整していくわけです。乱暴な町会ですから警察官が２人くらい来てくださいとか、交通整理に。そういうような形で一緒にコラボしていこうかなという話です。余り 100 パーセント行政を使うとなると、それこそ規正、規正という形になる。

　例えば今度「こんにゃくえんま」という源覚寺さんがあって、あそこの前に「こんにゃくまつり」というのを下仁田の観光協会と一緒にやるのですけど、テントを貼って手作りこんにゃくを作ろうかという話があって、保健所へ申請を出したわけです。そうしたら衛生が、まず水道の掛け流しのシンクで、きちんと鍋を洗ったりしなければいけないと。そこらのテキ屋さんのように

ポリバケツに水を入れて洗うようなやり方では駄目ですよと。それで近所の居酒屋さんを借りたり、そんなような形でそういう問題をクリアして。これも行政から話を持っていったら、かえって捻れた状態になってしまいますから、やっぱり民間は民間で良いところがあるわけです。民間なら弾力的な動き方ができますから。その背中をちょっと押していただければいいんじゃないなと。それが行政の役割じゃないかと思います。

○市川委員：押してくれないと、多分どうしようもなくなるところが来ると思うのですね。

○上田委員：いや、押してくれなかったら、押させるようにすればいいじゃないですか。

○市川委員：そうですね。

○上田委員：はい。

○市川委員：ぜひそういうふうに動いてください。期待しています、伝通院が開かれるのをいつか。

○上田委員：だんだん責めていますので。４年前より２年前、２年前より今年、だんだん緩和してきましたから。あと 100 年もすれば 100 パーセント取り込めるかもしれない。

○市川委員：その頃はないんじゃないですか、もう。

○上田委員：気を長くやっていきますので。ＭＩＣＥの誘致ですよね。ＭＩＣＥの誘致自体より、アフターコンベーションをどうするかという方が大事じゃないですか。アフターコンベーションをどうするかということで、それを目的としたＭＩＣＥの利用になるわけでしょう。

○野口座長：そうですね。ただ、ＭＩＣＥそのものの商売にするのか、それとアフターＭＩＣＥというかの両方ですよね。一般的にはＭＩＣＥそのものは、特定の人たちしかもうからないです。旅行会社か施設側、施設を持っている役所なのか、どこなのかは分かりませんけど。

○市川委員：イベント会社ももうかりますけどね。

○野口座長：かもしれないですね。でもその後の、アフターコンベーションはすそ野が広くて居酒屋も儲かるかもしれないし、お土産屋さんも儲かるかもしれない。いろんな可能性があるので、そういう意味ではＭＩＣＥそのものの本体がないと、いくらアフターコンベーションだけあっても、例えば入れ物がなかったらできないですし。

○上田委員：特にこのＭＩＣＥの意義ですね、イベントという部分、文京区の中で一番大きなイベントをしているのは東京ドームです。年間の集客力はディズニーランドを上回っています。場外馬券場なんかがありますので。今 3,500～3,600 万人、年間で来ているではないですか。ディズニーランドが 2,800 万人位ではるかに多いのです。このシビックセンターと東京ドームにその位の人が集まってくるわけです。それが北側に文京区の方に行かない。みんな元の水道橋に戻ってしまう。だからこのアフターコンベーションをどうするかは我々の最大のテーマなのですよ。

○野口座長：そうでしょうね。そうすると、アフターコンベーションということは、ある意味会議はどこでやっても同じ会議です密室でやれば。でもその後に、お仕事の後の楽しいことが待っているよというその魅力でもってどこでやろうかなと選ぶわけですね。その時に選んでもらえるようにするためには、やっぱりアフターコンベーションの情報づくりなのですけど、そこもやっ

ぱり情報発信で、例えば教育関係のイベントをやっていただいても、教育関係の方なんて、多分硬い方向で遊ばれると思うので、そういう人たちが来ても大丈夫ですよ、というような話なのか。それともラスベガスみたいに、終わった後はもうスロットとかカジノで楽しんでくださいというのもある、ショーもありますよとか。それはいろんな売り方があるので、北海道みたいに大自然が待っていますよ、沖縄がそうですけど、そういうのもありますし。どういう魅力で、横浜なんかあれですよね、すぐそばに中華街がありますとか、みなとみらいの中にはショッピングセンターもあります。みなとみらいの中のコンベンションセンターの売りっていうのは、そういう複合的な都市的な魅力も、チャイナタウンもあるしという、そこで遊んでくださいという、そういう提案ですね。そういうのはどういうふうに、文京区の中でパッケージできるかということですね。

○白井委員：文京区はないですよね。繁華街がないですからね。ですから、お寺さんを開放していただいて、最後お茶席みたいにして、アフターコンベーションをお寺さんでやるとか。そういう他ができないようなことといえば、和風料亭の素晴らしいものがあるわけじゃないし。何もないですよね。それで、観光協会としては食のブランドの 100 選を出して、これをラリーにしています。食べ物屋さんだけのラリーと、これをすべて網羅する、100 パーセント回るっていうので、そういうのを企画しているのですけれども。出店している方たちに言わせると、これはあまりにもチャチだとこの間すごく叱られたのです。小冊子にしてくれと。これを持って歩いたら、すぐボロボロになっちゃうし破けちゃうとか言われて、一応商工会議所と観光協会で予算がないからこれしか作れない。今増刷はしているのですけれども。この辺は区長さんが、そのラリーの提案なんか出したわけですから、それぐらい一生懸命区の食文化を活性化しようとするのであれば、区としてそれぐらいの小冊子を作ってくれてもいいのではないかという意見も聞いておりまして。だから色んなところでやっていかなければならないかなと。今、観光というのは走り出して、あまりにもいっぱい本数が、観光協会でもパニック状態で、人材育成とこういう活性化とか、五大まつりとか、いっぱい協賛とかしておりまして、人数がすごく少ない中で精一杯やっているのですけれども。それぞれがこういうボランティアの方とか、そういうことを立ち上げて、この食をもっと発展させようとか、あるいはこういう史跡回りをやろうとか、何か１つに特化してやってくださる考えが出てくると、すごく活性化していくのではないかなと。観光協会で全部するといってもとても無理ですし、逆に観光協会が背負ってしまうとその中でしかできないので、もっと一般の人たちが、これを見たら、じゃあ地域でみんなでやろうみたいな、そういうことが起きてきたらいいのかなと。いくら提案しても見るだけで、捨てられちゃうというのが多いわけですね。いくらこういうパンフレットを作っても。それをどう皆さんが活用してくださるかというのがすごく大事なところだと思っています。

　でも、これもある程度強引に作ったというのがあって、うちは入ってないから嫌だとか、あんなところが入っているからうちは協力できないとか、色々あるのですけどね。でも取りあえずこれに挑んだことは、素晴らしいことだと思うので、これは２年でしたか、３年で一応、また見直しがあるので。で、この中だって観光協会に入ってない人がすごく多いわけですよね。こういうふうにして皆さんに宣伝していただいても、入ってないっていう方たちに対して、やっぱり文京区の観光に対してもっと積極的に取り組もうという、その区民の方たちの姿勢がまだまだ足りないというか、そういう意識がまだないのかなと。それもこちらからの働きかけが弱いせいもあるのかもしれませんが。全部観光協会に入ってもらうための動きをしないとか、口では言っていながらなかなか実行ができないような状況なのですけど。そのような観光協会として色々課題がいっぱいあります。あれもしなきゃ、これもしなきゃと思うことがたくさんあるのですけれども、中々実行までいかない。一方的に発信をしているだけで、発信しているうちに先で消えちゃったみたいなことが起きたりするので、その辺をどうやってうまくできて、一緒に協力してやっていただける方たちが出るのかということに考えています。

○野口座長：そういう、観光協会さんが最初は大変な部分も、その話をするのが今日の本当の話でないですけど。ＭＩＣＥなんていう話になった時に、一番聞かれるのは、例えば会議の時にパ

ーティーするのだけど、「仕出ししてくれるお店なんかあるのですか」と真っ先に聞かれるのです。その時に「そんなところあったかな」、「このリストも用意しています」とか、国別にこういうものが食べられる人、こういうのは食べられない人がいるのですけど、ベジタリアンの人でも大丈夫なお店はありますか、ちゃんとリスト用意していますと。そういう意味ではデータを持っているだけでも価値があって、何かの時にパッと出せる状態になっているかということが大事なのですね。

そういう意味では、ここで言っているＭＩＣＥの誘致という時に、リストそのものは、今、紙が薄いとか批判あるかもしれないけど、情報を集めたということに価値があって、後々ＭＩＣＥのパンフレットって作るのです、ＭＩＣＥを一生懸命やっているところは。そういうところは、レストランはこれだけ充実していますということを冊子に載せて、それが広く世間に広がるわけですから、そういう取り組みは、必ずしもそこで終わるわけじゃなくて、後々別の形で使えるようになるわけですから、今回は食ですけど、そういうことにかかわる情報をいかにアップデートし続けられるかというか、すぐ出せるような状態で待っているかという、そこがポイントかなと思うので。今すぐ結果が出なくて大変だとは思うのですけど、恐らくはそういう見方で、同じそのリストでも、必ずしもそれを持って食べ歩きする人をイメージしないで、もっと別の見方で。

例えば、旅行会社の人はどう考えるかというと「500 円でお弁当出るお店とかありませんか」とか聞いてくるのですよ。「今回のパッケージツアーはバス付きで 5,000 円なのでお昼代はどうしても 500 円じゃなきゃ困るのです」とか。その時に 500 円で出せるところ「待ってください、ここにリストがあります」というような使われ方も想定しなきゃいけなくて、必ずしもフラッと来た一般客ばかりがターゲットじゃないので。そういう意味では、そういうことを区がやるとまずいのです。平等じゃなきゃいけない、すべての会社に。だけど観光協会さんは、ちょっと立場が違うのでこういうニーズに対してはこういうお店を紹介するということをやってもいいはずなので、そういう意味では各店がどういう使い勝手なのかということですね。価格帯とか。外国のお客様はまず聞きますよ、「30 ドルで飯食えるところないか」と。30 ドルだといくらかなというところから始まって、変なところ紹介すると高過ぎたとか、逆に安過ぎたとなるので、必ずきますね、てんぷら食わせろとかすし食わせろと。そのときにパッと 3,000 円でご飯食べられるところ、教えてくれという時にパッと出て来る。そういう情報管理ができているかということですね。すると旅行会社とかイベント会社とか、そういう所の問い合わせにパッと答えられると。そこは本来的には求められている機能だと思うので。それの１つのアウトプットの仕方がその冊子なのであって、本当は、旅行会社向けも作るべきですよ。本格的な観光地であれば。一般客には 800 円で売っている弁当だけど、旅行会社さんだったら 500 円ですよとか、そういうのがあるのですね。

○上田委員：それはいいですね。今、文京区商連 1,300 店舗くらい加入しているのですけど。現在、カードを処理できるお店の分類を始めているのです。その中で三井住友のビザを使った中国の銀聯も取り込みたいなと思っているのです。アクセスしてきたのがトヨタファイナンスなのですけど、あちらのほうからの提案で、かなり 2.8 とか 3.5 とかすごいのです。「これなら使えるな」と。そんなプレゼンがあったので、慌ててみんなで今資料を集めているのですけど。そのデータができれば、今お話したようなのが結構使えるかもしれないですね。情報が売れるかもしれない。

○野口座長：情報は売れるのです。とにかく、ある一定の量の観光客が来るようになった時に問題になるのは、トイレがどこにあるかと駐車場がどこにあるのか、団体でお昼ご飯が食べられる所と、大体ここです。そういう情報を観光協会さんがパッと出せる状態にしておくと、何かの時に、例えば突発的に急にお寺を見たいと言い出しているのだけど、お寺を見ることもできるし、かつ大型バス３台止められるところどこですか、なんていう時にパッと答えられるかどうか。

○白井委員：トイレマップ必要ですよね。

○野口座長：トイレマップも加味することできる。

○白井委員：専用でやっているＮＰＯがあるのですけど。トイレマップ作っている会社。

○野口座長：そういう情報を蓄えることも、４番目の体制づくりに当然入るわけですね。もしくは、そのＭＩＣＥの誘致というところについても同じようなことが言えるわけですけど。必ずしもお寺がどこにあるかということばかりじゃないのですね。そこを生かすためのインフラというのがあるので。ですから、トイレなんかに象徴されるようなインフラの情報というのを、すぐにマップにして配りたがるのですけど、そうじゃなくて、ちゃんと把握して、マップにすると何が駄目かというと、なくなっちゃったトイレを持ってくる可能性があるわけです。古くなって、更新しないと。むしろ配ることよりも更新し続けることが大事で、そうする体制ができるかどうかということです。駐車場なんか特にそうですね。ビルが建ったりなくなったりして、空き地が減ったり増えたりするので、そういう情報を常に把握している体制ができているかということです。

ＭＩＣＥそのものの会場は東京ドームさん、もちろん１つの枠になると思うのですけど。必ずしも会場が文京区内になくても、アフターコンベーションだけ引き受けますよという存在であってもいいと思うのです。いずれにしてもＭＩＣＥに向けた情報の加工というか、整理とか、そういうのはどこかが核になってやっていかないといけないでしょうし、やっぱりそのＭＩＣＥをやると経済効果があるのだということも、どこかで謳っておきたいですね。受け入れる側面だけじゃなくて、やっぱりＭＩＣＥをきっかけに見てもらって「ここ、いいね、今度プライベートで来ようか」。実は沖縄なんかはそういうことを狙っているわけです。会社で会議をやって終わったら、今度家族で一緒に来ようかなと思わせるという。そういうことも考えなきゃいけないですよね。

またその議論を踏まえて、また今回もご意見シートがあるわけですね。ですから、もう１回見ていただいて、今日の議論の延長でお気付きの点がございましたら、何なりとお申し付けあったらと思いますが。今度は８号について、事務局からご説明をいただきたいと思います。

○事務局：それでは続きまして、第８号のアカデミー推進計画観光分野資料（案）と書いてございます資料について、簡単にご説明をさせていただきます。先ほどの骨子と同様、取り組みの柱が１～４までございますけれども、それごとにこれまで皆さんにお出しいただきました分科会での議論の内容、またその後に事業意見シートでお寄せいただきましたご意見、それに加え、以前皆さんに事業シートを書いてくださいと送らせていただく時に、他区でこのような取り組みをやっているという事例などもお示しいたしましたけれども、そのように他区で、もしくはほかのまちでやっているような事業で、文京区の取り組みの参考になるようなものをピックアップして入れております。まず取り組みの柱１が 11 ページにありますけれども、その上に米印で書かれてあります通り、分科会や意見シートで、皆さんから寄せていただきました事業については大きな黒丸で示しております。その他、他区とかでやっているような事業に関しては、少し小さな黒丸で示してございます。

まず取り組みの柱１、こちらは「まちあるきを中心とした資源の発掘・活用・創出」ですけれども、基本施策１、こちらが「文の京の誇りとなるまちなかの魅力発掘の磨き上げ」ということで、骨子の中で基本的な方向というところで、先ほど議論がございましたけれども、本区の魅力をさらに高めていくために、区民自らが地域の魅力を発掘し魅力を高めていく取り組みの柱を推進しますという文章で、大きな方向性を書いておりましたけれども、じゃあ、この魅力の発掘と磨き上げを行っていくために、具体的にどのようなことをやっていったらいいかといったことをまとめていくものが、この事業（案）という形になってまいります。例えば、基本施策１の中には委員の皆様から出された事業（案）としまして、一番上にあります観光資源の発掘と魅力の開発から、文の京のキャラクターづくり、またはまちのネーミングづくり、そして観光名所のはがきの作成や配付、そのはがきや作成をする際には、伝統工芸士の方に作成を依頼したり、フォトコンテストの入賞作品を活用するというようなアイディアをいただいております。

また、そのほかのまちでやっている事例としては、先ほどありましたけれども、ＭＩＣＥなどでイベントなどを行う際に、普段は余り使われていないような歴史的な建物をイベントや会議の

場として活用していくというようなことがあったり、地域への愛着や誇りの醸成に向けたイメージやキャッチフレーズづくりをやっているようなまちもございます。このような形の基本施策２、３、４で取り組みの柱１をまとめております。皆さんに色々とご意見を出していただきながら進めた方がいいかと思いますので、中身につきましては、皆さんご意見の中で出していただければと思いますので、説明は簡単ですけれども、以上とさせていただきます。

○野口座長：ありがとうございます。いかがでしょうか。前回ご記憶かと思いますけど、皆さんに黄色いポストイットに書いていただいて、ペタペタ貼って出したのと、あと皆さんがご自宅にお帰りになった後、頭をひねっていただいて、出していただいたアイディアと、それからほかの地域で行われている先進的な事例というか、そういったものをただ先進的というだけじゃなくて、今回これを盛り込んだ方がいいと思われるものも入れています。ご検討いただきたいと思うのですけれども。これが具体的な、実は事業（案）になっていますね。これを実際に事業としてここでやるということです。具体的に実行するアイディアですね。

○上田委員：まちあるきの点について１つお話いたします。文京区商店街連合会は今年が 60 年目にあたり、60 年の記念冊子を作ります。文京区を５つのブロックに分け、まちの特性・文化・歴史を冊子に載せてまちあるきをしようというテーマを掲げて。もちろんまちあるきということは店舗紹介も絡んでいますから、歩けば当然店舗があると。メインはそっちの方かもしれませんけど。今、編集委員会を立ち上げて、これで３回目になりますかね、７月の末にもう１回やるのですけど。その中で一応叩き台としてのまちあるきコース、こんなのがあるのです。これは今叩き台で、これを５つのブロックの皆さんに渡して、肉付けをしてくれと。その中に意味を入れて、この場所はどういう特性があるか、この場所はどういう歴史があるか、この場所でどんな物語があるかというものをこの中に入れていこうと考えているわけです。約 120 ページ位の冊子の中にこれを入れていこうかなと思っています。写真を入れて。本当のこととかうそのこととかも入れまして、極端に言えば落語の世界に出て来るようなシーンがあるじゃないですか。文七元結とか、根津神社の。あんなのは全部昔の圓朝が勝手に作った話ですけど。そんなのを載っけていこうかと。

○野口座長：やっぱりまちあるきのニーズは、ものすごく強いのですけど、一方でずっと歩けるかというと、もちろん当然ないのですよね。そうすると１つ必要なのは目安になる所用時間がどの位になるかと書いておくのですね。

○上田委員：それもこの間言われました。

○野口座長：ええ。だから要は半日ぐらいで楽しめるものはないか。はとバスさんが人気なのは、そういう隙間時間でちょっと案内してもらえる魅力みたいですね、ある限られた時間で１つのテーマがクリアできる。それは歴史がテーマなのか、今おっしゃったみたいな文学とか落語の世界を味わうのか、それから「鬼平犯科帳の世界」を見に行くなんていうのも結構好きな人いますよね。そういった何かテーマ性というのは確かにまちあるきには必要かもしれないですね。

○上田委員：趣味に特化したようなコースを作ってみたいなと。だから趣味に合う人は楽しいけど、合わない人は来ないでしょう。それでもいいかなと思っているわけです。

○野口座長：こういうルートを作ると、必ずそのルートに載っている、おっしゃったみたいな商店街の方々というのが意識するわけですけど、その意味で本当に意識するように、マップに書かれているロゴマークとお店の店頭に同じロゴマークを付けておくとか、そういうことをしないと「このマップに載っているところと、ここは同じなのね」という意識が生まれないので、そういうことが実際のまちあるきには必要になってくるわけですね。今、はとバスさんなんかが「築地

食い倒れツアー」、とにかく築地の食べ物屋ばっかり回って、おなか一杯になって帰るという、そういうのがはやっているみたいです。必ずしも文化・芸術だけじゃなくて、おなか一杯になるということも注目されているみたいですけど。ずっと昔に聞いたのですけど、文京区の大規模な開発計画はどこかにあるのでしたっけ。

○小野委員：再開発。

○野口座長：再開発というか。

○上田委員：春日３丁目というところですけどね。通称春３と呼ばれるところです。

○野口座長：そこの中身は何になるのですか。

○上田委員：まず 150 メートル塔が１本、100 メートル塔が１本、それが核になり周辺にちょっと橋を渡したり、そういう形でこのシビックの高さと大体同じようなのが１本立ちますから。

○野口座長：中身は何が入るのですか。

○小野委員：住宅と事務所と商店ということですよね。

○上田委員：もっと面白い話は中央大学が戻ってくるんじゃないかと。八王子に行って子どもが集まらないと。

○野口座長：うちも思われていますけど。

○山本委員：遠いですもんね。

○上田委員：そう、あまりにも辺ぴでね。しょうがない、また都心に戻るかって。

○山本委員：東洋大学は戻ってきましたね。

○上田委員：戻りましたね、瑞穂から全部戻しましたね。跡見も戻しました。

○山本委員：そうですか。

○上田委員：都心回帰が始まったわけですよ。やはり東上線沿線とか、中央線のはずれだとかいうと、やっぱりつらいですね。

○野口座長：耳の痛い話ですね。今日はそのことは忘れたいので、別の話題にしたいと思うのですけど。

○山本委員：そうですね。

○野口座長：その再開発の計画の中、例えば東京駅の前のサピアタワーとか新丸ビルだとか、ああいうのも期待以上に観光客が集まっているのですよ。想像以上に。

○山本委員：集まってないのですよね。

○野口座長：いや、最初は集まった。１回行くと「もういいや」となっちゃうのですけど。ただ、東京駅に来た人はちょっとのぞきたいと思わせるものがあるので、あそこのビルに入っているお店は、ちょっと特殊なお店が多いので、そういう意味ではいわゆる全国どこでもあるようなお店じゃなくて、あそこにしかない店もあるので、お店の選び方を工夫したのだなと思うのです。再開発と絡んでねじ込めるようなものを考えた方がいいかなと思うのですけど。

○山本委員：先生にとって文京区の観光って一番は何だと思われますか。

○野口座長：そうですね、前回申し上げたのですけれども、歴史的なものと東京ドームとか、今日は水道橋駅から来たから、学生時代よくＪＲＡへ行ったなとか思い出したのですけど、色んなものがあるのですけど、イメージが１つになってないので、僕は、前お話したのですけど「歴女サミット」をやるとか、そういう歴史がある、あるというふうにだけ言っているのではなくて、実際にその歴史を生かしたイベントをやるとか、なぜイベントをやるかというと、東京ドームがあるのだから、歴史もあるしイベントをやる場所もあるという、すごく恵まれているので、そういう意味では、京都的な歴史じゃない意味での歴史を生かせるようなイベントを開催するとか、何かそういうので人を集める場所かなと。あまり歴史とか文化だけで、人が集まってくるというような所でなくて、それをちゃんとイベント化して人を集める力があるという、交通の便もいいし。イベントするには最高の場所だと思うので。しかも、終わった後に、歴史的なものを見に行こうといえば、ちゃんとあるという。

しかも大学もあるので、じっくり話を聞きに行こうと思えば聞きに行けるというような、何かそういう場所かなと。そういう意味では即、場所かなというふうに思います。ところがそれだとまじめ過ぎちゃうので、終わった後に地元のおじさんがうまい焼鳥屋連れてってやるよというふうにちょい悪おやじが案内してくれるというのが僕のイメージなのです。するとよそ行きの文京区じゃなくて、ちょっと裏の路地に入ると美味いもつ焼き屋があるのだっていう所を案内してくれるというのがあると、魅力がぐっと広がるのではないかなと思うのですけど。そういう在り方っていうか、歴史の生かし方っていうのですかね。

○山本委員：東京ドーム忘れていました。そういえばこの間外国の方が英語観光ボランティアで回った後「東京ドームも見たい」とおっしゃられたのですよ。ちょっと方向だけご案内したのですけど、やっぱり人気、忘れていました。何か根津神社とか護国寺のイメージが強かったのですけど。そうですね、歴研とか今はやっていますものね、歴女とか。

○野口座長：だから「歴女サミット」なんて文京区じゃないと、逆に開催する資格がないのではないかと僕は思うのですけど。

○山本委員：そうですよね。それ、早いほうがいいですね。今、タイムリーですよね。

○上田委員：去年もそんな話が出ていましてね。いわゆる商店街グループで、全国すずらん通り商店会サミット。

○山本委員：どこにあるのですか。すずらん通りって。

○上田委員：日本中にあります。

○山本委員：名前がね。文京区でやるのかと。すいません。

○野口座長：あります。

○山本委員：ありますか。どこにあるのですか。

○上田委員：すずらん通りもあります。もの凄くあります。この間も会津若松行ったら。それから地蔵通り商店街をやるとか。これも東京だけで 20 個所ぐらいありますね。向島にもあるし有名な巣鴨にもあるし、文京区では江戸川橋にもありますし、そんなのを集めて全国でやったら大変な数になるかもしれないです。やってどうするかって、それがまだ全然決まってないです。ただやろうかっていうだけの話で。

○山本委員：東京ドームっておいしいですね。気が付かなかったですけど。

○野口座長：そうですね、生かしたほうがいいですね。

○山本委員：神社しか私たち頭になかったのですけども。

○上田委員：意外なこう使うのです。

○山本委員：そう、東大を使えないかとよく思う、東大すごいですよね。

○上田委員：東大は会場借りて、あそこに松本楼が入っていますから、松本楼で飯を食って帰るとか。最近大学がやたらレストランを引きずり込んでいるのです。

○山本委員：そうですよね、テレビで特集やっていました。去年見ましたけど。東洋大学もすごいシェフが腕ふるっていると。

○上田委員：あそこは大勝軒ってつけめんが入っていますから。

○山本委員：そうなのですか。

○上田委員：池袋のね。

○野口座長：ヨーロッパの人たちはお寺見たがるのです、アメリカ人とか。でもアジアの人たちはあんまり興味ないのです。むしろ近代的なものとか、ジェットコースターとかの方がはるかに好きですね。

○山本委員：国民性で分かれるわけですね。

○野口座長：そうです。あと旅行経験とかによって違うのですけど、昨日から中国のビザが緩和され、しかも元高になりましたので、多分これから物凄くびっくりする位のスピードで増えると思うのですけど。彼らはいわゆる日本的な伝統的なものより新しい日本の姿に興味があります。

○山本委員：秋葉原じゃないですか。

○野口座長：秋葉原はそうなのですけど。秋葉原はもう１つの日本の新しさの象徴なのですけど。ですから彼らはこれから旅行経験を積んでくると、恐らく東京ドームみたいなものも次に見たいターゲット、東京ドームに限らないですけど、都市的なものというか近代的なものとかに関心を持つようになるのではないかなと思いますし、実際に香港とか台湾のお客さんたちは、もはや観光地資源を見に来るのではなくて、

○山本委員：買い物ですか。

○野口座長：買い物もありますし、例えば、ジャニーズのアイドルのコンサートを見に来るのです。わざわざ日本に。東京ドームでやるわけですから東京ドームに来るわけです。そういう人の流れは、多分これからガラッと変わります。そういう意味では、別に古いものを否定しているわけではなくて、もちろん大事なのですけけれども。再開発されて新しくなった所にも当然のことながらお客さんが来るのだという意識を持って、再開発なんかも見ていかないともったいないというか、生かし切れないのではないかなと思います。びっくりしますよ、うちの留学生は「何でうちに留学しにきたの」と聞いたら「嵐がいるから」って。それで選んだのって聞いたら「はい」って。

○上田委員：いるのだ。

○山本委員：すごい効果ですね。

○白井委員：ここの上の展望台は、夜でもお客さんは入れるのですか。閉めちゃうの。

○小野委員：８時半までです。

○白井委員：ここはもう、本当にこっちへ繋げてこっちへ持っていけばいいのに。タダだからね。見るの無料って書いてあって。

○上田委員：昔は結構遅くまでやっていたのですけれどね。色んな問題が起きてやめたのですよね。

○白井委員：今度、再開発に繋げて、何かそこにまた観光客が行きたいようなものができたら、繋がるかもしれませんね。

○野口座長：夜景も大事な商品ですよね。近代的な都市としての東京というものを。だから文京区を、このシビックセンターから見たベスト夜景っていうのはどこなのかとか、どこから見たらいいのかっていうのも研究して提供すると面白いとは思うのですけど。どうですかね、今皆さんにアイディアを出してもらったものとか、付け加えさせてもらったやつを見ると、やっぱり数的にばらつきがどうしても出てきちゃうのですけれども。そういうのはどの程度整えますか。

○小野委員：今日、ご意見シートで「区民のおもてなしの心、醸成」というのが 15 ページのところにあるのですけれども、ここをもうちょっと増やしていただければ。

○市川委員：区民のおもてなし。

○野口座長：15 ページですか。ホスピタリティの醸成ですね。

○小野委員：はい。ご意見シートでは区民のおもてなしの心、醸成に関する事業のご提案をお願いしますとしているのですけれども。

○上田委員：15 ページに載っていますか。

○小野委員：15 ページには「文の京全体としてのホスピタリティの醸成」となって、この辺の事業をもう少し出していただけるとありがたいなと。

○上田委員：ちょっと弱いのだね、ここは。

○市川委員：文京区って、おもてなしをしたい気持ちを持っている区民いるのですか。多いですか、少ないですか。とっても少ないように思えるのですよね、「我関せず」と僕は見えます。

○山本委員：そうです。

○白井委員：そう思いますね。

○山本委員：そうでもないですよ、２極化していますよ。

○市川委員：そうなのですか。

○山本委員：うちだって、あそこ住んでいて 180 名位いますけど、そういう人がまだいますよ。

○市川委員：いらっしゃるのはいると思うのですけどね。

○山本委員：うちの町会でも結構いますから。だからそういう人が、やたら口を出してお邪魔なことばかりしているのが嫌だというマンション属もいますけどね。

○市川委員：どうもこの「おもてなし」が希薄に思えてしょうがないのです。理由はしょっちゅう見るのですけれども、５～６人で固まって歩いているのです。色んなお寺さんに入ったりしているのですけれども、彼らは地図見ながら歩いている、周りは何にもないのです。人っ子一人いないとか、食い物屋もベンチもトイレもない、それに対し彼らどうするのだろうと思って、僕はいつも見ているのですけど。どうしちゃったのだろうというのが逆にあるのかもしれないですけど。

○野口座長：ホスピタリティの心の問題と仕組みの問題というのがあって、例えば、京都の人が本当に全員ホスピタリティがあるかというと、外からお客さんが来ることには慣れているわけで、道を聞かれると結構親切に教えてくれるのですけど、でも本当に引っ越して来られると身構えたりするのです、京都の方って。だから本当の意味でいつでも人をウエルカムで迎えているかというと、そういうわけじゃなくて慣れているだけだと思うのです。日々それが生活ですから。そういう意味では気持ちの問題なのか、今おっしゃったみたいに「案内の地図がないね」とか、そういう意味でのホスピタリティが、ホスピタリティの有る無しなのか、ホスピタリティの良い悪いの判断という問題があるわけです。無いものに良いも悪いもありませんので。そういう意味では、まちとしてのおもてなし、ホスピタリティというのをおもてなしと翻訳するのは、僕は間違っていると思っていますが。親切もホスピタリティに含まれますし、思いやりも含まれます。いろんなものが含まれるので。そういう意味では、恐らくここで言っているおもてなしというのは、ハードウエア的に整備しなきゃいけないことと、気持ちの問題と両方あると思うのです。皆さんがそういう気持ちがないとか、看板が足りないとかという状況は、ある意味前から申し上げているように、文京区においては当然です。それに皆さんが依存しているわけじゃないので。でも依存している地域だと、物凄く一生懸命やる。人々はそれにどうしてもかかわらなきゃいけないので。

○市川委員：文京区でも依存しているところと依存していないところがあるのではないかなと、思えてしょうがないのですけど。

○野口座長：もちろんそうだと思うのですね。

○市川委員：地区毎の特性があって、ある地区は当然依存しなきゃいけないところがある。そうじゃない所、多分ほとんどそういう所だと思うのですが、そうすると「我関せず」なんですよね。
○野口座長：それはもうどこでもそうなっちゃうのですね。

○市川委員：ただ、人は道を聞かれりゃ親切にみんな答えていると思いますよ。

○野口座長：アンケートを採ると、日本のイメージは「イメージがない」というのがイメージなのです、外国人から見ると。でも行った人は何て答えるかというと「こんな親切な国はない」と思って帰るそうなのです。日本人はシャイだったりするので。それは文京区民だけシャイというわけではなくて。平均するとそういうデータがあるのです。そういう意味ではシャイならシャイなりに、案内看板を付けるとか、当たり前のこと、つまり観光客をこれから受け入れようとするのだったら、やらなきゃいけない当たり前のことと、それからゆっくり育てていかなきゃいけない気持ちの問題、心の問題、これは別なので、本当はそれを分けて考えなきゃいけないですよね。それからみんなが本気になれるかどうかは、どう観光とかかわっているかによってきますので、当然のことながらボランティアガイドなんかをやっている人はガイド中じゃなくても、困っている人がいれば積極的に話し掛けようと思うわけですから。それはやっぱりどういうふうにかかわっているかということだと思うのです。
　そういう意味では 15 ページでしたか、ここのホスピタリティの醸成というところは、書き方とすれば若干乱暴というか、ホスピタリティマインドを醸成するのか、ホスピタリティの溢れる状況にするのかということで、だいぶ話が違うので。これをおもてなしの向上と言い切っちゃうと、笑顔が足りないとかそういう話になるので、本当はそういうことだけではないのですね。例えば、商店街で「お買物中は荷物を預かります」とか、そういうのも欧米人から見たらホスピタリティなのです。荷物預かり所はあって当然ですので。日本はほとんどないですね。荷物預かる所、コインロッカーだって探すのは大変なので。そういう意味では京都はコインロッカーがたくさん整備していますけど。あれはなきゃ困る、観光できないので。ああいうのがホスピタリティですよね。そういう意味ではここで言う区全体としてのホスピタリティの醸成というのは、それはお客様を迎え入れる体制ができているか、覚悟ができているかというところなので。

○小野委員：ここは一応ビジョンからいくとマインドの。

○市川委員：でもハードウエアも入るのですよね。

○上田委員：ハードウエアは楽ですよ。

○市川委員：いや、入るか入らないかと考えると。

○上田委員：例えば、北品川の方へ行くとやっていますから。

○小野委員：このビジョンから行くとマインド。

○市川委員：入らないって感じですか。

○小野委員：ハードは、違うところで入って来ると。

○上田委員：そうなんだ。マインドを指導するのは難しい。それは無理だよ。

○野口座長：それは大変ですね。

○上田委員：「そこまでやるか」って言われちゃう。

○小野委員：啓発事業とかになっちゃうのでしょうね。

○野口座長：自分がもてなされるのが一番いいのです。「ここが最高のホスピタリティです」という所にみんなが行く。だから、ある観光地は地元の人たちにホスピタリティを高めなきゃいけないといっても伝わらないので、そう思われる所にみんなして観光に出掛けていって「なるほどここはすごいね」とみんなで体感するわけです。だから観光の補助金の中には住民を海外旅行に行くというのがあるのです。

○山本委員：それいいですね。それ必要ですね。勉強しなくちゃ。ホスピタリティ。

○市川委員：ここにいるみんなで行けばいいんですよ。

○野口座長：考えても分かんないのですよね、これは。教育しても、もちろん教育して分かることもあるのですけど。そうすると、サービスの問題とホスピタリティの問題とごっちゃになっちゃうので。それを小学生にやらせるとありますね。「小学校において観光資源や地域の歴史等を学ぶ機会をつくる」と書いてありますけど。やっぱり外国人なり異文化、日本人同士でも、ほかの地域から来た人から見れば、文京区は本当に分かりやすくできているかとか、そういう意識ってやはり必要ですよね。例えば、この話をする時、地域の皆さんに言うのは、特に商店街、飲食店に言うのは「皆さん、メニューはお店の外に出していますか」まさかのれんだけじゃないですよね。どういうことかというと、外国の人は、すし屋ののれんは分かるけど、ここに入ったら5,000円なのか、１万円なのか、３万円なのか分かんないわけです。

○市川委員：それ僕らも同じですよ。

○野口座長：同じですよね。地元の人たちは「あそこはどんなに食っても１万円だよ」と分かるのですけど、初めて来た人は分からないですね。それは僕に言わせるとホスピタリティがないのです。どんな人が来ても気安くお店に入れるようにメニューは外に出しておきましょうねと。そんな難しいことじゃないと思うのです。欧米はみんなやっています。イタリアだろうがフランスだろうが、レストランの入口に必ずメニューが置いてあります。それを見てお金が払えそうだったら来てくださいと、そうなっているのです。

○上田委員：最近、イタリア料理、いわゆるイタメシ屋さんとかフランス料理屋さん、ブラックボードでちゃんと出していますよ。ヨーロッパスタイルで。出してないのはおそば屋さんとか。

○野口座長：時価なんていったら怖くて入れないじゃないですか。

○市川委員：僕は出てないと入らないですよ、どこへ行っても。

○上田委員：この間も問題になったのですけど、お客様のわがままをどこまで辛抱するかという部分ですね。一番簡単な話で、最近廃業したお店やなんかで空き地がいっぱいでてきてコインパーキングがいっぱいできています。１万円札しかなくてコインパーキングにお金が払えないで、両替してくれと来るお客さんが結構いるのだって。１万円持って。

○山本委員：その方はお店に寄って。

○上田委員：近所のお店にね。だったら100円か200円のもの買えよ、お客さんならおつり渡す

と。100 パーセント両替はちょっと勘弁してくれというので、だんだん腹立ってきて「両替しておりません」って断るようになったわけです。これはホスピタリティがないのですか。
○山本委員：それは何か、頼む人の常識ですよね。

○野口座長：それは客も教育したほうがいいですよ。だからそういうこともあるのですよ。要は客を育てないと店が荒れる可能性もあるので、それは逆に言うと、外から来たお客さんに入ってほしくないお店はメニュー出さなきゃいいですし「両替お断り」って言えばいいんですよ。これは地元の人のためのお店だから、それはそれで守るべきだと思うのですけど。うちはホスピタリティをあげますと言っているのに、料金を示さないのはおかしいでしょうという話です。
　例えば、そういうことをやるというのは、必ずしも気持ちの問題だけじゃなくて、姿勢というか仕組みの問題でもあるので、そういうことをみんなで考えましょうとか。例えばお土産品でも、これは何なのかという時「おまんじゅうです」と言ってもよく分かんない。そういうのを例えば英語と中国語と韓国語で表記しましょうというのを呼び掛けるとか、それは外国人向けですけど。僕はホスピタリティのことを共感性と呼んでいるのですけど、相手の立場になった時に「何にお困りですか」という姿勢だと思うのです。必ずしもおもてなしじゃなくて。だから相手の立場に立って考える訓練をしなきゃいけなくて。
　例えば、これから増えるであろう高齢者の旅行客ニーズは、やっぱりずっと歩いていると疲れるからベンチが欲しいとか、そういうのは若い人じゃ分かんないです。今、観光の世界で非常に注目されているのは、３世代で住んだことがある子は感受性が豊かだと言われています。つまりおじいさん、おばあさんと暮らした経験がある人はおじいちゃん、おばあちゃんってこういうことで困るから、こういう手助けをしてあげた方がいい、直感的に分かるので。ただみんな３世代で住んでいるわけじゃないので、どうしたらそういう気持ちが芽生えるかということで、老人ホームを訪問するとかで高齢者のニーズを理解しようとか、そういうことをしているわけです。
　だから外国人の立場になってみれば、おすし屋さんが１万円なのか３万円なのかは大きな差ですから、それは困るよねって、そういうことが発想できるかということだと思うので。それは必ずしも一人ひとりの人間の気持ちということじゃなくて、日本人の性格をパッと変えるわけにはいきませんので。ただメニューを外に出しましょう位だったらすぐできるはずなので、それは知らないだけ、気付いてないだけかもしれないので、そこはやりましょうとか。

○小野委員：それも事業になりますよね、メニューを外に出しましょうって。

○上田委員：築地のすし屋は、場外のすし屋だけど、もう 20～30 年前から 2,000 円とか 2,800 円とか、それしか出さない。それでメニューは板前のお任せ。何が出るか分からない。毎日 2,800 円。そのセットしか出さないという寿司屋ですけどね、ありますよ、それは。

○小野委員：メニューを外に出しましょう、メニューの多言語化をしましょうみたいな、そういうふうな事業ですものね。

○野口座長：そういうこともイメージしながらご意見シートに、もちろん一人ひとりの区民の気持ちの問題のことも考えてもらいたいと思います。皆さんが観光に行った時に、不便されたご経験があると思うのです。もし同じことが文京区で起こったら意味がないですよね。そういうことが起きないような区にしようという姿勢でアイディアを出していただくといいかなと思います。

○上田委員：そうすると、この３番にはどういう情報を載せたらいいですか。メッセージとしては。ホスピタリティの醸成とか。

○野口座長：これですよね。これはちょうど今日のご意見シートに書いてあるので、おもてなしの心の醸成と書いてありますけど、心だけにとらわれずに、仕組みというのも含めて何かアイデ

ィアを出していただいて。

○市川委員：後日でもよろしいのですか。期日はあるのですか。

○山本委員：７月９日ですね。

○市川委員：もうすぐじゃないですか。１週間後か。

○小野委員：１週間後です。すいません。

○市川委員：昨年の 11 月に出たスケジュールですけど、６月に議会への基本構想を提案となっているのですが、もうされたのですか。

○小野委員：そうですね。基本構想は提案して策定されました。

○市川委員：その内容というのはオープンになっているのですか。

○小野委員：はい、なっています。

○事務局：机の上に今日置かせていただいたのですけど、６月 21 日に議決をされましたものになりますので、これが決定されたものです。

○市川委員：６月 21 日。

○事務局：はい。今後については冊子になっていく予定なのですが、今お渡しできるのはこういう形で、ホームページからもご覧いただけます。

○市川委員：ありがとうございました。あと、変なことですけど、文京区でホームレス対策って何かやっているのですか。

○小野委員：対策ですか。

○市川委員：はい。文京区にはホームレスはいますか。

○小野委員：いますよ。

○市川委員：いますよね。特に。

○小野委員：公園などにいます。

○上田委員：文京区内に約 200 から 300 人位。

○市川委員：300 人。

○山本委員：そんなにいらっしゃるのですか。

○上田委員：うちの近所にも１人いて、３月に亡くなりました。お名前も知っていますけど。民生委員がカバーしていたのですけど駄目でしたね。今４区合同でホームレスの宿舎の世話をして

いるわけです。その当番がこの４月から文京区になりまして、今小石川のサッカー場の横に建てています。知っているでしょう、知らないですか。
○市川委員：いや、知らないです。

○上田委員：あの小石川サッカー場の横にプレハブを建てて、あそこに何人位収容できるのですかね。聞いてないですか。

○小野委員：何人かはちょっと分からないですけど。

○上田委員：うん、聞いているでしょう。

○市川委員：文京区で 300 人ってことは、それよりはあるでしょうね。

○山本委員：300 人すごいですね。

○上田委員：全部個室にしてあります。ホームレスさんは、個人主義の人が多いですから、同居するのが嫌なのね。だから、ちっちゃな部屋ですけど全部個室にしているらしいです。トイレとかおふろ場は共用らしいですけど。中は見たことないですけど、ひそかに区で作りました。

○小野委員：あれは区の持ち回りで。

○上田委員：持ち回りなのです。今年は文京区なのですよ。

○市川委員：４区っていうのは文京、台東。

○上田委員：荒川。

○市川委員：荒川ともう１つは北区ですか。

○上田委員：いや、文京、台東、荒川。

○上田委員：千代田。

○上田委員：いやいや、都心のほう行かない。

○山本委員：クイズになっちゃう。

○上田委員：確か北区。豊島じゃなく台東ですね、台東が一番多い、何て言ったって上野の山があるから。

○山本委員：うちの方は図書館にいるものですからね。幼稚園と図書館の同じ所にいるのですよ。あれ、どうかなと思いましてね。ちょっと。

○山本委員：何のお当番なのですか。プレハブを建ててあげると、何をして差し上げるのですか。

○上田委員：取りあえずあそこでちゃんと支援して。

○山本委員：区の中に作ってってことですか。

○上田委員：ええ、そうです。

○小野委員：ちゃんと自立するように手助けをしている。

○上田委員：ただ１週間位という話だね、期限が。１週間の間に今までホームレスをやってきた人が、どこかのアパート探すとか、職業を持つとか、これはほとんど不可能ですよ。

○市川委員：不可能ですよね。

○山本委員：悲しい話になって。

○上田委員：ただ文京区の場合は、その自立支援施設のすぐ隣がハローワークですから。

○山本委員：そういうことなのですか。

○上田委員：そういうことじゃないのですよ。たまたまなのです。

○市川委員：住所を一応持つということですね、要は、彼らはそこに入って。するとハローワーク登録できますからね。

○上田委員：そうですね。まあ選挙権もあるだろうしね、そうすればね。ただ、中々住民票とかそういうのを取るのを嫌がっているから身寄りの人を探すのが難しいです。だから亡くなった場合、亡くなった人の遺骨をどうするかと、物凄く難しいらしいです。

○市川委員：本人の確認しようがないですからね。

○上田委員：だから民生委員さん結構苦労していますよ。

○小野委員：ご意見シート、おもてなしの心の上にフィルムコミッションについてどのようにお考えですかというのを書かせていただいたのですが、フィルムコミッションの説明が１枚ありますので、これについて区としてやるべきか、やらないべきかという、やるのだったらどういう手法とか、何かいい案があったら書いていただきたいと思いますのでよろしくお願いします。時間がないので説明は割愛させていただきます。これを見ていただくとだいたい分かりますので。

○野口座長：今ホームレスの問題なんて話があったのですけど、ちなみにニューヨークなんかは、落書きを消して景観を倍にしたら観光客がどっと増えたという。

○山本委員：治安もよくなったってことだね。

○野口座長：治安がよくなったっていう。落書きというのは人の気持ちを不安にさせる、逆に不安だからだということらしく、落書きを徹底的に消したらよくなったということもある。まあ豊島区さんも、池袋駅前の駐輪場の問題があって、人の気持ちに影響を与えますので、もしこの文京区さんがそういう意味での課題を抱えているのだったら、観光を切り口にして、これじゃあ人を呼べないぞという議論もできるのですけど。

○市川委員：実はそういうふうに持っていけるのかなと思って。それでしたのですけどね。

○小野委員：場所どこですか。ホームレスさんがいるところ。

○市川委員：本駒込図書館と幼稚園のところ。あそこは、障害児の方の若駒の里とか色々あるものですからね。公園もありますし、児童公園があって、そのわきにたむろしているのですよね。

○野口座長：大阪なんかは、今本当にそれで困っているのですけど。西成っていうエリアは、いわゆる日雇の労働者が集まっているまち、新今宮っていうところなのですけど、そこに、一泊2,000円、3,000 円の宿が集まっているので、外国人旅行客が利用するようになっているのです。そこが注目されて観光で人が来ているという、おかしな状況なのですけど。本当は治安の問題とか、そういう美化の問題ですね。たばこのポイ捨てが酷いとか、そういうのも観光を疎外する要因ではあるので、長期的には本当にお客さんがたくさん来るようになったら、そういうことも恐らく問題としては顕在化してくると思います。それはお客さんが捨てるという場合もあるし、そもそも区民が捨てているというのも。区を利用している出勤している人も含めて。そういう人たちのマナーみたいな問題が出て来る可能性もあるのですけど。今まであまりそういう話が出てきてないので。暴走族が一生懸命に走っているとか、そういうのはそのこと自体が観光を進める時に阻害要因になってくるのですけど。今のところ、直線で走りやすい道路とかないわけですよね。すいません、ちょっと時間がオーバーしてしまいましたので。

○上田委員：若者がいなくなったのですよ。

○野口座長：最近は元暴走族の人たちが復活して暴走しているらしいです。油断大敵だそうです。

○市川委員：それはかなり危ないですよ、すごいですよ。

○山本委員：そうですか。中年暴走族。

○野口座長：今日もご意見シートをお願いしております。フィルムコミッションのこともそうですけど、全体的なことについてのご意見シートもございますので、後ほど日程の説明もあると思いますけれども、次回、この分科会の仕上げ作業に入りますので、特に先ほど少しご議論があった骨子（案）７号とか今の６号と８号をよく見ていただいて、抜けているところとか、先ほどご指摘があったように文章のおかしなところとかを含めてご指摘をいただきたいと思います。特に事業（案）については、先ほどのホスピタリティの部分と、それからまた新たにほかの部分も含めて、ご提案があればぜひご記入いただき、より良いものにできたらいいなと思っております。では次回について事務局からご説明をお願いしたいと思います。

○事務局：では第３回分科会、最後になりますけれども、スケジュールは前回お配りしている今後の分科会スケジュールのとおり、８月５日木曜日 午後６時 30 分から 21 階 2101 会議室が会場となりますので、よろしくお願いいたします。先ほど先生からもお話がありましたとおり、ご意見シートは７月９日、来週の金曜日１週間しかないですけれども、短い期間で恐縮ですが、ご記入いただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

○野口座長：ありがとうございました。送っていただいた資料の中にライフスタイル分析というのがあったのですけど、面白そうだなと思うのですけど、今のこの会議体では消化できないわけですね。うまく取り上げられないというか。私は、たまたまこれはどのようにしてこういう分析がなされたかというのを学問的に理解できるのですけれども。ただ実際にこれをどう生かすかという話になると非常に難しくて。難しくてというか、議論にどう加えていったらいいのかというのが非常に難しくて。あるとすれば先ほどのお話であったみたいに、観光客が増えることを迷惑がるかどうかとかですね。それから人の気持ちとして、例えば外からお客さんが来ることを面白がるとか、おもてなししたくなっちゃうとか、そういうのはやっぱり地域毎にあるみたいですね。ですから、そういうことかなと思いますし。もし、このデータを生かすとすれば、どんな生かし

方があるのかというのは富士通総研さんに、次回何か短くでも。
○事務局：少しだけよろしいですか。

○野口座長：はい。

○事務局：観光という話でいうと、外から人を呼ぶということで、この分科会ではその話が多く、それはそれで非常に重要なことだと思うのですけど。こちらのビジョンのもう１つの柱は、区民が文京区を楽しもうよというのもあると思うのです。じゃあ文京区の区民性とか、そういうのを見てみないか。生活の価値観、ライフスタイル、価値意識とか、その辺を見てみる１つの手法としてライフスタイル分析というものがありますということで、やってみたのです。そこからアプローチしてみようと。ほかのところと比べて、こういう特徴がありますよというようなものは少しだけ出ておりますので、そういう形で参考にしていただければと思っています。

○野口座長：これの因子の反応のところにマイナスというのがありますね。例えば２ページ目のところに前向き、前ペース志向因子という因子名が付いているのですけど、それはマイナスということではないということですね。

○事務局：そうです。

○野口座長：プラスとマイナスって書いてあるのですけど、その左側に向上志向因子と書いてある。これは向上志向があるかってことが書いてあるのですけど、プラスだと向上志向があるのです。次に活動的志向因子。これはマイナスが付いているので、ではないということ。活動的志向でないということなので。ちょっと見方が若干難しかったかもしれないのですけど。こういうのもちょっと見ていただいて、皆さんの実感と違うかもしれませんし、皆さんはきっとみんな活動的なのだろうと思うのです、こちらにいらっしゃる方は。そうじゃない方もたくさんいるという可能性があったりとかするので、こういうのも見ていただくといいかなと思います。
　では時間オーバーして大変申し訳なかったのですけれども、次回いよいよ最後になります。ちょっとまた暑い中になりますけれども、ぜひお知恵を出していただいて良いものにしていきたいなと思います。本当にありがとうございました。

以上